

経済学説史の方法——経済学の現状についての批判と展望のための (2)

川 田 俊 昭

〈科学批判〉のためのテーゼとしての〈経済学の歴史〉、……斯かる認識の *Dialektik* を、文字通り一貫して・歴史的に捉えようとする（通論、乃至その方法論としての）野心的な試みに、（一見、“畑違い”ではあるが）山根銀二『音楽美入門』（の方法論、美学……シュムペーターの所謂「美学の社会学化 *Soziologisierung*」）がある。

同著序に、曰く。

「この本は、音楽について正しい認識を求めている知識人のために書かれたものである。……考え方の筋……。……個々の知識をそれだけのものとして採り入れるためよりも、その知識の根底にあるべき正しい考え方・観方を掴むことを主眼としている……。色々な事柄を雑多に挙げて頭に詰め込むことは目的でなく、……その事柄によって多くの事柄が代表され、本質が表されるように取扱い、音楽の営みの一番奥深いところにある仕組みを解明しようというのが狙いである。これが、この本の音楽美入門であって、音楽入門でないわけである——」

更に、緒論に、曰く。

「音楽とは何か……。昔から多くの美学者や音楽家がそれを求めて色々試みているが……。……何れも、それを生んだ時代と環境を越えて普遍的に妥当し、音楽の真髄に徹するものとは言い難い。ここでも、そのような認識自体が歴史と社会の産物であり、そういうものとして初めて相対的な正しさをもち、歴史の進展に伴って真理への道を徐々に辿ってゆくに過ぎぬことが示される。我々も又今、自分の美学を手に入れなければならないのであるが、それはこ

の歴史の瞬間に我々を取巻いている音楽の目まぐるしいほど雑多な姿が、あるところまで順序立てられ、見通しをつけられ、真に理解され始めるか、或はそれへの緒を掴んだ暁に、自ずと醸成されるものであってよい。ともかく、それは究極にあるべきもので、始めからあるものではないだろう。と言っても、我々はそれに近いものを心に暗示として受取ってはいる。……その漠然と掴まれたものは、思考の遍歴の過程に深められ、修正され、一層完全なものにされてゆくであろうし、それが又唯一つ可能な行き方の様に思えるのである。」

即ち、認識としての「本質」が、歴史的に——「思考の遍歴の過程に」解明される、という主張である。

同様の論理、殊に Dialektik (の構造) が、音楽美そのものについて、次の様に展開されている。

「……音楽が美しいというのは、どういう意味で美しいのであろうか。……音楽が美しいのは、……その反対のものとしての醜さを含めて、一層包括的に美しいのではなからうか。醜いことも美しいことなのである。両者を包括した美の世界がそれである。その意味において音楽は美しいのである。それは言い換えれば、音楽が我々にとって何かの《意味》をもっていることであり、《意味》をもつことが美しいことなのである。……美の世界が、このように、素朴なものに長く止まらないで、始めは美しいとされなかったものをも包摂して拡がってゆくことは、美しさが、単に感覚上の判断に拘束されず、それを突き抜けて一層高いものへ進んでゆくことを意味している。素朴な美は新しい美に止揚される。その場合の新しい美は、初めの素朴な美しさと素朴な醜さを自分のうちに統一しており、その意味で美は構成されていなければならないだろう。……この飛躍のうちに、美一般が芸術美に転化する契機が秘められているのである。勿論、この場合の単純な《構成》によって、どこまで芸術が生み出されるか、一応疑問であるが、素朴な美がその反対のものを包摂する新しい美へ止揚されるところに、少くとも芸術への糸口が手繰り出されるのである。何故ならば、この飛躍は、素朴な美の自己運動として起るのではなく、それと我々との対決によって、その関係のうちに Rowe れるものであるからだ。ここにいう我々とは、人間であり、歴史的な存在としての社会的人間である。その人間が、単なる感覚上の美醜の判別を越えた一層具体

的で必然的な美の世界を要求する時に、素朴な美はその対立物を含めての新しい美へ高められる……」

斯様に、同著は、かなりきびしく論理（科学的美論と称すべきか）を詰め乍らも、「認識自体が歴史と社会の産物」とする——換言すれば、（外的）契機に安易に（——筆者には、そう受取れる）触れた点、問題がある。（ここでは、人間——折角の人間が、社会の中に埋没している。人間（性）の喪失。）

我々は、我々の周囲に、斯かる人間不在の相対主義（下手な環境論の垂流）……凡庸極まる方法の——「経済学史」（乃至「経済思想史」）を、余りにも多く見ている。

或は、不出来な学生諸君よろしく、「現実々々……現実はどうだから……現実はあるから……」と、（悪しき実証主義を）喚き散らすこと——更には、（自己の知的劣悪をカバーせんがために）我々の現実に関する判断のすべてを、単なる現実における（社会的・経済的）利害関係に関する教義（所謂「イデオロギー」）にひき直さずにおかないこと——筆者の如きは、その片鱗にさえアレルギーを惹き起す程である。（この点に関しては、先に援用したスタークにも難がある。）

——これについては、シュムペーターの次の言葉（筆者も本稿での立場上、全く同感であるところの）を以てしての応酬が、最も適切であろう。

即ち、曰く。

「……経済学者の場合には、人々は、この現象を社会的・経済的条件の変化、従って又……実際の問題の変化によって説明せんとする誘惑にさらされるかもしれない。けれども、我々は、斯かる環境の変化がないところで行われている科学の研究においても、同一の現象を発見する。……問題と方法とは、環境が変わるが故にのみ変わるのではない。それらは又、ある科学の一定の構造の中に具現されている分析的仕事で、（……漸次的移行に抵抗し、ある時期が来たら一挙に革命的に飛躍するといった）いわば抵抗を含む変化の仕方に変化する（という事実）の帰結としても変化するのである。」（『経済分析の歴史』、46頁、訳90頁。）

よって、筆者は、(本稿では)環境の変化、いわば歴史的環境(それは一つには、経済についての歴史的記述、即ち“経済史”(乃至“経済社会学”)の問題であるが)を、(むしろ、故意に)与件 *given, Daten* として考慮の外に置いた。——経済(学)自体の自生的・自律的な歴史性を、ヨリ強調せんがためである。

特殊・固有の自己運動、自己発展(としての歴史性)……。

——そして、それが又、シュムペーターの「発展」の概念そのものの直接的な投影であることは、言を俟たない。

シュムペーターの「発展」……「……ここに『発展』とは専ら、経済が自己自身から生む経済生活の循環の変動、『自己自身に委ねられ』て外部からの衝撃によって動かされていない所の国民経済に起り得べき変化のみが理解さるべきである。……實際上では経済的發展と呼ばれている現象にしても実は全く経済の与件の変化にのみ基づいたり、将又経済はこの変化に漸進的に適應するに過ぎぬことが明らかになるならば、我々はそのには如何なる経済的發展もないと言うであろう。斯く言うことの意味は、次の如くである。即ち(上述の如き)国民経済の発展とはその最内面的の本質に至る迄毫も経済〔内〕的に説明さるべき現象ではなくて、それ自体発展なきところの経済がその〔外の〕環境の変化の中に言わば捲き込まれたものであり、発展の根拠、従ってその説明は、経済理論を通じて原理的に記述されるところの一群の事実そのものの外に求められねばならぬこと、これである。」(『経済発展の理論』、95—6頁、訳158—9頁。)

……「経済社会そのものの在り方から生じ、且つ社会の制度的・自然的構造が絶対に不変であると仮定しても尚看取し得る変動……。」(シュムペーター「経済変動の分析」)

「物理学者は、自然をこういう風に観察する。即ち、自然過程が最も的確な形態で、攪乱的影響によって混濁されること最も少く現われる場合を採るか、或は可能な場合には、実験を、過程の純粋な進行が確保される条件のもとで、行うのである。……問題として取扱うのは、これらの法則自体であり、

鉄の必然性をもって作用し、そして貫徹するこれらの傾向なのである。」(マルクス『資本論』、第一版序。)

「分業、土地私有権の成立、自然に対する支配の漸増、経済の自由と法的保障——これらこそ、実にアダム・スミスの『経済社会学』を成立せしめた最も重要な要因である。これらは、容易に看取し得る如く、経済的過程の社会的外圍に関わるものであって、この過程に内在する何等かの自発的なものに関わるのではない。」(シュムペーター『発展』、91頁、訳 151 頁。)

環境——それが自然的環境であれ、或は歴史的・社会的(……文化的・政治的・経済的)環境・条件であれ——その如何、変化(のみ)によっては、(たとえそれらの集約が可能であっても、説明さるべき対象(過程)そのものに即した・直接的媒介(純粋な)の把握が欠如している限り)事柄の本質が解明され得ないということは、その実、古今を問わず、指摘され来たことである。

等しくギリシアをテーマとしたものの援用、二つ——

「温和なイオニアの空はホメロスの詩の典雅に寄与するところが多かったには違いない。けれども、この空だけがホメロスを生むというわけのものではない。事実、その後必ずしも、これを生まなかったのである。トルコの支配下には、どんな詩人も出なかった。」(ヘーゲル『歴史哲学』)

「かなり以前から、既にたびたび、考え直しては不審の思いに捉えられたことがある。否、今後もおそらく、その不審の治まる時はあるまい。こういうことだ。そもそもギリシア本土は、同一の気候のもとに拡がっており、ギリシアの人々も、すべて同じ教育を受けているのに、それなのに一体どうして、我々の気質は、同じ在り方をするようにならなかったのか。これが、その不審である。」(テオプラストス『人さまざま』)

『莊子』齊物論に謂う。「天地の外のことについては、聖人はそのままにしておいて論じない」と。

我々(の科学者)は、天地のことはおろか、人の世(=社会一般)そのも

のについても、これを、（直接には）とやかく言わないことにしよう。

「^{りくごう}六合の外は、聖人存して・論ぜず、六合の内は、聖人論じて・議せず。」

更に、次いで、我々は、前述の音楽美（絵画その他を含めての芸術美）への参加、その楽しみの如きもの——（一般的常識に反する様であるが——）それも又、（科学的認識、真理への参加におけると同じく）単なる受動によってではなく、（我々の意識における「要求」——）能動——一つの「意識的な努力」、を必要とすることをも、この際註しておく必要がある。

「音楽というものは、いつ如何なる時でも楽しめるというものではない。魂がこれを受けつけ、これに耽り、力を注がなければ駄目なのである。音楽好きだからといって、いつもこの御馳走を味あう用意があるとは限らない。」（D. デュアメル『慰めの音楽』）

「気質」……「魂 Seele」……人間（性）……更には、人間（性）の自己運動、自己発展……。こういったもの（所謂“内側から見た人間の理解”）の暗合が、一体何を意味するか。まさしく、その“意味”，在り方を、我々は是非にも、確認、（出来得れば）解明せねばなるまい。（後述）

以上、何れにもせよ、（何らかの意味、形式で）概論ではなく通論が要請される根拠は、それを理解するに決して難くない。

とりわけ、我国の経済学書における筆者の所謂“何でもや主義”，“百貨主義”に象徴される事態（事柄の本質的理解に到達し得ない単なる好事癖 Dilettantismus、猿真似）が、それである。

そこで一部分一部分は掌中に握っているが、

お気の毒ながら精神的脈絡が通じていない。

過去の形骸は別としても——一体、この国に、文化-精神は在るのであるうか。

……もたもたと脂肪ぶとりした……一貫性、必然性……覇気、情熱の不足

した……システムのない常識的（か、やたら難解・不消化）な文字の羅列……。単に事実、理論の断片を並べただけの概説書……概論……。……退屈きわまる代物。……ゲーテ『ファウスト』の所謂「^{ごっちゃに}骨董羹」。

……君が自分で感じていて、それが肺腑から流れ出て、
聞いているみんなの心を
根強い興味で引き附けなくては、
世間を擒にすることは出来ない。
そんなにして据わっていて、膠で接ぎ合せて、
人の馳走の余物で^{ごっちゃに}骨董羹を拵えて、
君の火消壺の中から
けちな火を吹き起しても、
それでは子供や猿どもでなくては感心はしない。

筆者の指導教官の一人であった某先生は、当時、我国の経済学（者）の現状を、この援用で諷して居られた。（宜なる哉。）

「猿がのぞいても、そこには使徒の顔は映ってこない。」（K. C. リヒテンベルク）

遠く、はるか以前、マルクス、更にはシュムペーターによって、同様の事態が指摘されている。

先づ、マルクス——『資本論』第二版への跋に、（恰も我国の現状を、そっくりそのまま彷彿させるかの如く）書いている。

「経済学はドイツでは今日只今に至るまで、依然として一つの外国産の科学であった。……経済学の生きた地盤が欠けていたのである。経済学は完成品としてイギリスとフランスから輸入された。ドイツ人の経済学教授達は、生徒たるに止まった。外国の現実についての理論的表現が、彼等により、彼等を取巻く小市民的世界の意味で解釈され、かくして曲解されて、彼等の手で一つの教義集に転化させられた。科学的無力に関する全くは抑え切れない感じと、実際には馴染みのない領域で教師ぶらねばならぬ不安とを人は文献

史的博学を見せびらかして、或は諸知識の混淆たるいわゆる官府学——ドイツ官僚の希望に充ちた候補者はその煉獄に耐えねばならぬ——から借用された無縁の材料を混合することによって、覆い隠そうとしたのである。ブルジョア経済学の古典時代におけると同じように、その崩壊時代においても、ドイツ人は依然として単なる生徒であり、盲従者 *Nachbeter* であり、追従者 *Nachtreter* であり、外国の卸売商館の小さな行商人であった。」

煉獄……我国では近経とマル経というわけのわからぬ偏見、対立（単なるイデオログ、亜流達の亜流なるが故の縄張り争い、彼等には“経済学初歩”こそ相応しい）が、尚余分に、学生達を悩ましている。

この国の最先端の学会でさえ、そこでの共通テーマは、せいぜいよくて一年前、外国（主としてイギリス、アメリカ）で討議し尽され、従って古臭く陳腐となった問題（所謂“古典”）を（説得力、必然性の乏しい——ウスッペラな、妥当を欠くより拙劣な手段で）改めて牛の反芻よろしく、掘り起しているに過ぎない。結果は、如何にしても、（ミミズの如き吝な収穫はあったとしても）全体として先のレベル（の實質、royal road）を追いつくことは到底かなわぬこと、目に見えている。

シュムペーターも、同様事態を、『学説・方法史の諸段階』に、（古く、16世紀以来、経済理論においてドイツが遂にイギリスに追いつき得なかった所以を、同様事由で）書いている。

「……討議の水準は、イギリスのそれに敢て劣るものではない。しかし、これらは更に一層展開せられることなく、又事物の正常的経路において期待されるが如き高さに迄は到達していない。これが、やがて、外国の成果を継受するに至らしめ、それが何よりも自国における固有の有機的発展を全く妨げたのである。……元来、あらゆる認識は、数世紀にわたる仕事であり、一度欠けた発展の鎖の環はこれを補完することが出来るものではない。外国人の手によって供給せられた成果は、これを理論的には理解し得よう。しかし、その成果が連続数代にわたる自国民の手になったものでない限り、これに対しては常に感情的な無理解が対立せしめられ、継承せられたものの生々たる発展を妨げるのである。ここにこそ、ドイツでは、経済理論〔固有の経済

学、「理論経済学」] がイギリスにおけるが如き確固たる地歩を占めることが出来なく、又その基礎的把握〔シュムペーターの場合、その課題は『理論経済学の本質と主要内容』において果された、が〕が、通例冷淡に採り上げられ、本能的に忌避せられるに至り、そのために固有の経済的な主題に対するあらゆる駁論〔所謂「メンガー＝シュモラーの方法論争」はその典型である〕やあらゆる逸脱に最初から好都合な地盤を樹立するに至らしめた理由が存するのである。〕(『社会経済学大綱』第1部第1巻所収) 33頁、訳40—41頁。)

——にも拘らず、(マルクス当時より) ドイツにおいてはイギリスとは異った意味の独自の経済学(ドイツ歴史学派、《(史的) 経済社会学＝経済学》としての) が、(少くとも第二次大戦終了に至るまで) 発達し得たことを、我々は看過してはならない。

よって、シュムペーターも、(引続き) 言う。

「イギリスにおいて経済学を研究すれば国民経済学Volkswirtschaftslehreとなり、ドイツにおいてこれを研究すれば国家経済学Staatswirtschaftslehreとなった。」(34頁、訳41頁。)

後進国ドイツが、経済学(それは確かに限定された形ではあったが) ……他の諸科学においても、世界的レベルに、更にばそれを抜き得た理由は那邊にあるのか。(ドイツ、ドイツ人としての問題は、後出。)

それにひきかえ、我国は只管、亜流(乃至亜流の亜流)としての途を歩んだ。亜流……追従……迎合……。同じ生を享けながら、日本人の生きざまのこの無慚、この歪曲、この醜態……。敷かれたレールの上を突っ走ることにのみ得意な、この幼稚、……この拙劣、……この拙速。(その揚句の象徴が、トヨタ、ニッサン、スズキ……であろう。)

亜流(及至亜流の亜流)——彼等のやり方は、(まさしく亜流としての本質に相応しく) 既に定まったものしかない。

即ち、そこにあっては——

「個々人やグループは、〔1〕ただ種々な指導者達に追従するか、〔2〕既に定められた方法を利用するか、〔3〕当面した問題に釣り込まれて丁度と

ころかまわす突っ走る競争のように論議」するか（シュムペーター『分析』、10頁、訳18頁。）

——その三つに一つ、或は二つか、その全部（又はそれ以上）の何れか、である。

この国（の社会科学）には、少くとも、舶載の既製品しか通用せぬいわば、（集团的）黙契があるかの如きである。

独創を生むべき才能は、その若いうち（殊に十代、シュムペーターの所謂「聖なる多産の時期」）に、（誤った教育システム・その他によって）早々とその芽を摘みとられ、むしりとられている。——御本人がそのことに気が付いた時には、既に後の祭り。才能（独創力）は枯渇し、加えて、（創造の糧となるべき、伝統的・歴史的堆積としての——）歴史、哲学などの基礎的教養・修練の完全なる欠如が、その再生を絶望的なものとしている。

（亜流から脱せんとして——）敢て、（本音を）叩き出さんとしても、出るは貧しく歪びつな音（珍説、怪説）ばかり。我々は、そのような憐れな、しかし同情すべきピエロを、我々のオーソリティーに、幾人か見ている。これ又、この世における重大な犯罪、或は災禍と言わずして、何ぞ。

日本（の科学）には、我々自身における“内発”，創造（発明）を取戻すため、元^{ルーツ}に帰って、基本から考え直す必要の、強く要請される所以である。

ともあれ、我々は、如上のマルクス、シュムペーの援用より、端的には（と言うのは、筆者の知性ではその本質にまで及び得ないと諦めるからであるが）、一応、次のようなことを認め得る。

即ち——

- (1) 一科学の現状（その必然性）は、むしろ、それ以前（即ち、その過去）に、多くを負うこと。

斯かる考慮、感覚を欠いた“計量経済学”（或は“理論経済学”）は、我々は無縁であるばかりか、ナンセンスで（さえ）ある。

- (2) この場合、“それ以前”とは、無論、（時間的な意味での）科学の歴史

(我々の場合、〈経済学の歴史〉)としても然りであるが、同時に、(次元の相違としての)科学以前の意味——“科学の哲学”、〈科学批判〉としても、そうであること。

そこにこそ、シュムペーターの所謂「基礎的把握」の意義がある。(斯かる「基礎的把握」の特殊問題への一適用が、雑誌「東南アジア年報」における筆者のアジア概念についての一連の取扱いである。)

- (3) 更に残る問題としては——マルクス、シュムペーターの両人が等しくドイツ人であり乍ら、(ドイツ人不得意の経済理論についてさえ)垂流に止まり得なかった——どころか、先進のレベルを遙かに抜き得たのは何故か。……彼等自身に(も)その理由がある——ということ、これである。

然して、(3)には、(1)乃至(2)に完全にオーバー・ラップし得ない固有・枢要な問題(むしろ(1)、(2)の関係を越えて媒介する——“哲学的人間学”というべき、個人・個性乃至人格に関わる)を含む、或は(1)、(2)に(3)が(それ自体独立した要素として)一枚噛む必要がある、というのが、筆者の考えである。(後述)。

斯くして、問題(1)、(2)、或は(3)に照応すべく、〈経済学の歴史〉、〈科学批判〉のシステム、その必然性(ある種の“精神現象学”、場合によっては“精神病理学”)を、(それが、構造 - 静学的であれ、或は発展 - 動学的であれ)開示する試みが、この際、不可欠となる。

筆者の講義題目における「経済学方法論」(前出)は、(新カント派、殊にバーデン学派に倣い)三つのパートを有するものとして規定される。

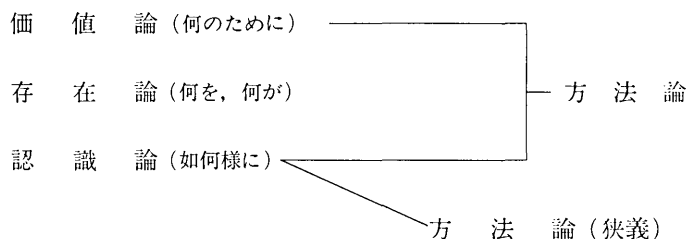
(1) 価値論

(2) 存在論

(4) 認識論(固有・狭義の方法論)

——これである。(第1図)

第 1 図

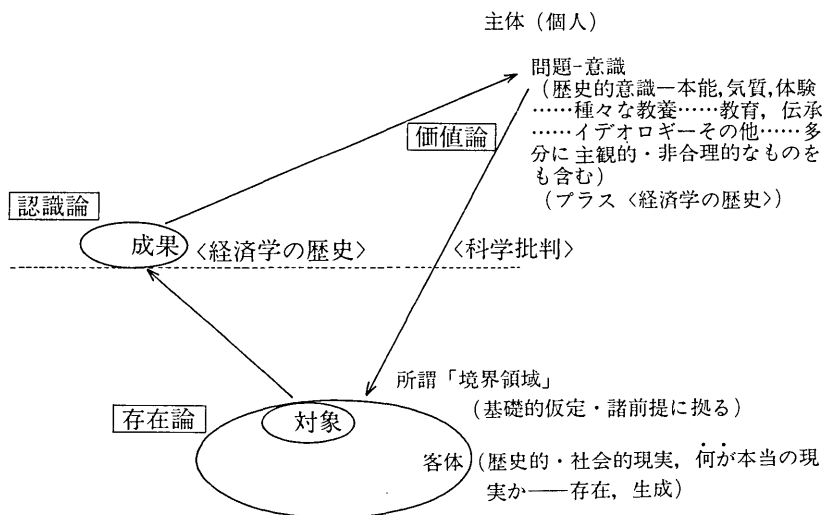


夫々、次のことを、主たる課題とする。

- (1) 認識主体は、客体と如何なる関係にあるか。
- (2) 一科学（経済学）の対象は、他の諸科学の対象と如何に区別せられるか。
- (3) 認識は如何にして成立し、如何なる性質のものか。

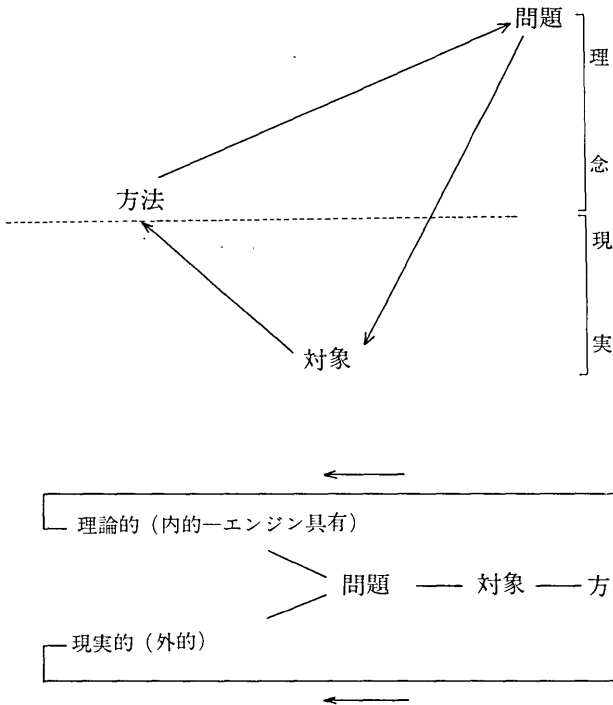
三つの関聯（その関聯裡に「経済学説」、「経済学説史」は形成される）は、簡単には、次の如き構造（意識構造か）として示される。（第2図）

第 2 図



この様な認識作用（認識行為）は、そのモチーフとして、たとえ最初は現実を契機とするとも、（独自の、特別な）主体における意識の深まり（問題—対象—方法……の繰返しによる意識の質的変化、深化……独立……理念の形成）に従って、認識者自身、認識者個人（の主体、理念としての存在）に、その動力が任せられることとなる。（ヘーゲル、或はそのフランス・イズム版というべきH. ベルグソンの場合と同じ。ヘーゲル流の認識＝実在として、我々の経済、経済—史も同様論理をもつことが臆測せられ得る。）（第3図）

第 3 図

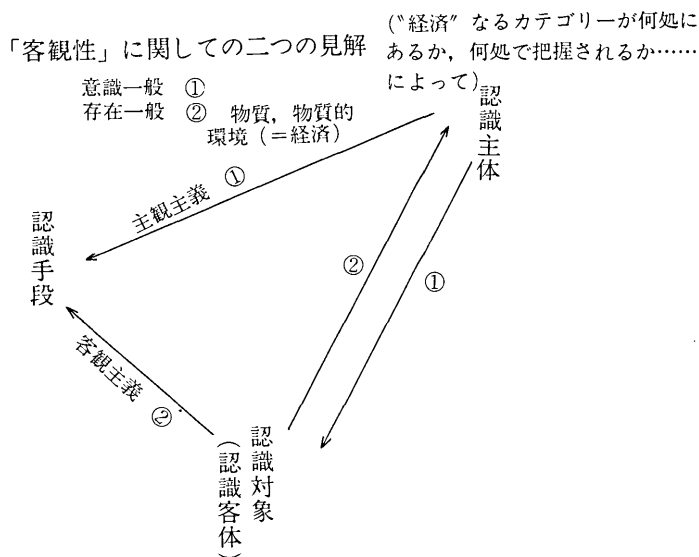


結局——経済の問題の中で最も基本的なもの、その始め（アルファ）にして終り（オメガ）……経済とは何か（問題—価値論）を問うことは、むしろ、

経済学とは何を研究対象にするか（対象 - 存在論）ということであり、経済学とは何か（方法 - 認識論）という定義を与えることである。

然して、真理の要請……真の一般性、"普遍妥当性 Allgemeingültigkeit" への要求……拡大は、この傾向（理念化）をヨリ一層強めることとなる。と共に、反面、現実への理念の支配、包括（それは一科学の有効、即ち"客観性 Objektivität"を保証する）も必然的にヨリ一層高まることとなることが、忘れず強調されねばならぬ。「科学的認識の指標は、認識成果が真理としてもつ『客観的』な妥当性のうちに見出されねばならぬ。」（三木 清『哲学入門』）（第4図）。

第 4 図



亜流における似非の一般性（との混同）に、注意せよ。

亜流の場合（我国の経済学（者）の場合をも含めて）には、真の意味での如上の条件（そのすべてが大部、殊に価値論）が欠けているからである。

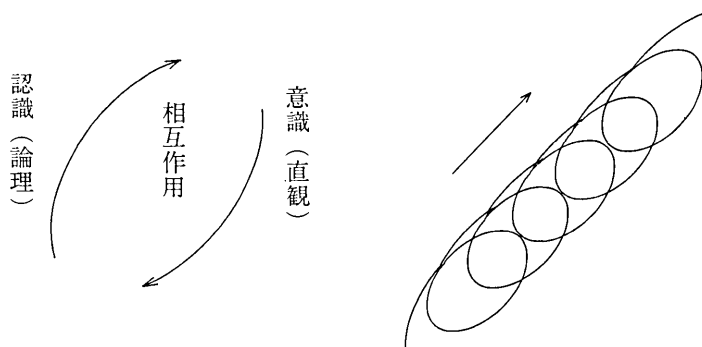
（価値論の欠如による——）問題意識の欠落は無論として、（存在論——）現実的客観性も……（認識論——）首尾一貫性——体系も……その厳しさも

……更には普遍妥当性（一般性）……従って又、当然、創造性も……（科学に関わる本質的なものは）すべて欠落している。

そこには、いかなる経済学（者）もない——とさえ、言い切ってよい程である。（我国の場合、仮に、経済学（者）が一切蒸発したとして、如何程の問題があらうか。）

尚、認識の（統一的）生成を、単に（いわば静的に）、認識主体、認識客体（環境）、認識成果に帰せしめず、認識作用（常時創造的に機能していることが条件の）という観点から、もっとダイナミック（動的）に、換言すれば、（主体の）認識行為——所謂「意識的な努力」自体に即して、理解せんとすれば、更に（綜括的に）、次の如く示される。（第5図）。

第 5 図



——と言うことは、この場合、経済学（経済学説、経済学説史）としての認識成果（即ち「理論」）が、一面、二つの要素、即ち“意識”と“認識”に還元され得ることをも、暗示する。

即ち、それは、（直接には）シュムペーターの所謂 vision, apparatus……（間接には）マルクスの所謂「研究方法」、「叙述方法」（の区分）に、略平行する。

勝れた考え方というものは、一体に（その深所において）、共通を有するものである。（——我々における意識、思惟の構造からする必然か。）

vision と apparatus ——シュムペーターのこの区別は、実は、哲学者ベルグソン（の認識論）の場合の、（一つの哲学体系における）所謂「哲学的直観」と「表現手段」（或はヘーゲルにおける「精神」と「物質」）との区別にも、よく似ている。——前者の何よりの特徴は、ここでも又、個性の深みから出るその否定の力である。

シュムペーターの言う。

「科学分析は……もしも『進歩がある』としても……論理が指令するままのものではなくて、新しい観念、新しい観察、新しい必要が与える衝撃の結果として、更に又新しい人間〔所謂“新人”〕や気質の結果として、生れるものなのである。」（『分析』、4頁、訳6—7頁。）

シュムペーターは、彼の所謂 vision（直観的・感性的な、ヘーゲルの場合も同じ）と apparatus（「理論」……歴史、統計……）を、夫々、次の如く特色づけ、区分している。

「社会の経済状態に関するあらゆる包括的な『理論』は、相互補足的ななし本質的には異なった二つの要素から構成されている。第一には、社会のその状態の基礎的特徴に関する——与えられた時における社会の生活を理解するためには、何が重要であって何が重要でないかということに関する理論家の見解がある。それを我々は彼のヴィジョン vision（直観的洞察）と呼ぶことにしよう。そして第二に、理論家の技術——彼が彼のヴィジョンを概念化し、それを具体的な諸命題又は『諸理論』にまで転化せしめるための装置 apparatus ——である。」（『十大経済学者』、268頁、訳377頁。）

ヴィジョン——「分析的努力に原材料を供給する分析以前の認識活動……」

(『分析』, 41 頁, 訳 79 頁。)

他方、マルクスは書いている。

「……叙述方法は劃然と研究方法と異なっていなければならぬ。研究は、素材を細微に亘って我ものとし、その異なった発展形態を分析して、その内の紐帯〔＝法則〕を探查しなければならぬ。この仕事が完成した後に初めて、現実の運動をこれに応じて叙述することが出来る。……」(『資本論』, 第 2 版後書。)

「……だから思考においては、具体的なものは、総括の過程として、結果として現れ、出発点として現れない。たとえ、それが、実際の出発点であり、従って又、直観と表象の出発点であるにしても。」(『経済学批判序説』)

然して、シュムペーター、マルクス何れの場合にも等しく、その vision, 「研究方法」において、その帰結として結局、問題となるのは、認識(理論構成)上最も困難な課題——認識主体(としての個人)が如何なる仮説、諸前提(或意味で——認識以前、科学以前ともいうべき)を理論(としての叙述)の前に設定するか、ということである。「科学は仮設の上に立つ」

シュムペーターは、「科学に従事する者」(個人)が、如何なる(具体的)手続きの順序を踏む(べき)かについて、(社会学者としては珍しく)比較的詳細・周到な断篇を残している。(『分析』, 45 頁, 訳 87—8 頁。)

次の如くである。

先ず——

- (1) 〔個人を前提〕……科学的努力の対象となっている一連の現象の探究に、理由の如何に関わらず自主的に且つ自力によって、乗り出す個人を想像すること……。
- (2) 我々が問題とする斯かる個人は、先ず第一に自ら研究せんとする現象〔“事実”としての経済現象〕を認識しなければならないし、又彼はこれらの現象が相互に何等かの関聯を保ち他とは区別されているもの〔境界領域、仮設として〕であることを認識せねばならぬ。……認知活動……

しかしこれは未だ分析的仕事と言い得るものではない。……分析がなさるべき客体又は材料を提供するもの〔マルクスの所謂「素材を細微にわたって我物とし」〕……。

（以上）……分析の先行必要条件……。

（以下）……分析……。

- (3) ……分析の仕事は、(事実上は)分離し難いが、しかし(論理的には)異った二つの活動から成り立つことになる。

一つはヴィジョンの内容を概念化することである。

……ヴィジョンの諸要素が正確な概念にまで固められ、よってもってそれらの内容の同一性〔所謂「同一性原理」〕を保持するための符号や名称が附せられること……。

……概念相互間の関係(定理乃至命題)〔法則〕が樹立されること〔「内的紐帯を探索」〕……。

他の一つは、更に経験的データ(事実)を漁り、これによって最初に看取したデータを豊富にしたり検討したりすること〔「異なった発展形態を分析」〕……。

以上二つの活動は相互に別個のものではなくて、その間に断えざる互譲応酬関係(＝弁証法)がある……。概念化を試みることは更に他の事実を漁り求める誘いとなり、発見された新事実はそれ自体取入れられて概念化されるを要する。

この両種の活動は絶えざる継起の間に、最初のヴィジョン並びに相互の結論を改善し、深化し且つ修正していく……〔vision と apparatus との相互作用〕。

(その他)

……科学的努力のすべての段階において、我々が興味を抱いている一組の現象を出来得る限りよりよく記述し得る図式や体系又はモデルを構築しようと努力し〔「素材の生活が観念として再現される」〕、これらは続いて「演繹的」〔理論〕或は「帰納的に」〔歴史記述〕展開せしめられる。

けれども、これらはその性質上当然に暫時的なものであり、常に我々の

掌握している事実のストックに対しては相対的なもの〔但し、その個人にとっては絶対的なもの〕である。

「曰く。科学とは、事実を発見 fact-finding し、それを解釈し、そこから推理（分析）する・専門化された研究技術を展開して来たような、一切の知識分野を言う、と。」（『分析』、7頁、訳12頁。）

シュムペーターは、先の認識過程（乃至手続き、ヘーゲル *Dialektik* = ベルグソンの過程ともいうべきもの——第2図、第5図）を、筆者の不満の余地がないほど（と言うことは、筆者の考え方と同様に、所謂“反省”の契機を主軸として）見事・十全に、（如上と重複するようであるが、繰返し）次の如く説いている。（貴重なるが故に、援用しよう。）

「分析的努力は、我々の関心をとらえる一連の現象——それが処女地のものであるか、或は既耕地のものであるかは問題でない——について、我々がヴィジョン *vision* を懐くに至った時に初めて出発する。最初になされる仕事は、このヴィジョンを言葉に表すか、又は概念に示すかにあるが、それは、このヴィジョンの諸要素が認知や操作を容易ならしめる名称を附せられて、多少なりとも秩序立った図式や構図の中に夫々配置されるように行われねばならぬ。しかし、その道程において、我々は殆ど自動的に尚二つの他の課題をも果すこととなる。第一に、我々は既に観察されたものに附加して新事実を蒐集し、それによって最初のヴィジョンに示されていた他の事実（のあるもの）が疑わしいものであったことを学ぶ。第二に、この図式乃至構図を構成する仕事自体が、当然、当初のストックに更に諸関係や諸概念を附加したり、或は一般にその中のあるものを除外したりする。事実的研究と『理論的』研究とは相互に援助しながら限りなく関聯し合い、自ら相互に検討を交え相互に新しい課題を投げ合い、結局は科学的モデルを作り出すのである。それは最初のヴィジョンの中の残存要素と上に述べた相互作用との生む暫時的な結合生産物に他ならない。それに対しては、漸増的に更に厳格な首尾一貫性や妥当性の基準が適用されるに至るのである。」（『前掲書』、42頁、

訳81—2頁。)

我々の認識成果（認識論の対象部分，“客観的实在”）は、恰も海面上に現れている氷山の一角の如く、我々の認識活動（の全体）そのものにおける一部にしか過ぎない。（たとえば、それが、スミスの『国富論』であり、マルクスの「資本論」である。）——問題は（“存在の根拠と意味”——）海面下の大部（哲学（ヨリ正確には哲学・哲学以前）が象徴、供与するところの）こそである。

斯かる意味で、（本稿の立場上からも——）筆者の大のお気に入り、K. W. v. フンボルトの設立になるベルリン大学——その“大学の理念”に集約される。

「……社会の進歩を支える学問研究の場が大学であり、技術者及び官吏養成の場が大学であってならない〔大学は“技術教育”の場ではない〕というのが、フンボルトの理念であった。神学、医学、法学、文芸という伝統的な4学部制度を踏襲しながらも、文芸部は哲学部として人文、社会、自然の諸学科を置くようになり、ここでは人間の自己発展と人間性の涵養が重要なこととされ、ここで養われた批判精神と規範が他の諸学部で教授される学問分野の基礎となるべきと考えられたのである。嘗ての神学部に代り、ベルリン大学では哲学部が大学での教育と研究の中心に据えられたことを意味した。この理念の帰結として、大学での教育は、〔亜流者よろしく——〕既存の知識を盲目的に学習することではなく、新しい認識を得るという教員の研究活動を通じてのものとなる。研究活動は外部からのあらゆる強制から自由であり、研究者の良心にのみ従うべきであるが、それは同時に孤独な営みともなった。……新しい大学理念は、その後ドイツ諸邦の大学で受け入れられ、現在にまで続くドイツの大学の伝統を形成して来たのである」（大西健夫『現代のドイツ——大学と研究』）

——この援用における一言一言がこれ又一つも洩らせぬ程、大いなる重みを有つ。

然して、斯かるドイツ的理念が、経済学の歴史についても、マルクスに、或はシュムペーターに、「むしろ革命という形で」、華と咲かせる実効を生ましめたとしても、決して異なことではない。

「生の最高の理想——就中ドイツ人の人間性の理想 Humanitätsideal ……ウィルヘルム・フォン・フンボルト……彼の著作には〔ヘーゲルにおけると同様〕自覚的な生を目指そうとする衝動、生命と世界とが我々に啓示するところのものとすべてを精神的に消化し同化しようとする衝動が消し難く残る。」(シュムペーター『社会科学の過去と未来』)

我国の亜流における場合、(亜流——“専門バカ”としての追隨なるが故に) 認識における斯かる真摯な主体的・体験的過程が完全に欠落していること——それらの場合には、せいぜい(舶来の)出来上りの既製品(しかもツギハギだらけの)をもって、政府(或は大資本、労働組合その他諸利害の)の“御用”に役立つ技術や(隷従を強いられる、低賃金の日雇いとしての)か——将又、単なる不毛(不生産的、無意味)な訓話の学(古きものを古きが故に愛好する下手^げの骨董趣味の)の徒として終始するか、その何れかである。(その何れによっても、我々自身は“疎外”に在る。)

然して、罪深く禍根を残すのは——殊に前者(学問者としての節操の切り売り、走狗としての)の場合である。

そして、それは、既にマルクス(或はシュムペーター)の予想し、確認していた事態でもある。

「……今や問題は、最早あの定理が正しいとか、この定理が正しいとかいうことにあるのではなく、それが資本にとって有利であるか、不利であるか、便利であるか、不便であるか……というようなことであった。利己的でない研究の代りに、買収された論難攻撃が現われ、囚われない科学的研究の代りに痛める良心と自己弁護の悪い意図とが現われた。」(『資本論』、第二版後書)

「……ある一命題について、これを支持する人の動機や、この命題が告げているように見えるものに対する賛否の意見を攻撃したり讃美したりして、これが議論をなすというような政治的闘争の安っぽい手段——それは不幸にして、経済学者の間においても余りにも普及したものとなっている——は、決して我々の重んずるところではない。」(シュムペーター『分析』、11頁、訳20—1頁。)

科学としての純粋さが損われること大なれば大なる程、斯かる不純さが濃厚となることは、これ又自明というべきであろう。

経済学者が垂流としてある程度が強ければ強い程（換言すれば、彼等が従事する科学としての実質が小さければ小さい程）——更に、一般的には、経済学（社会科学）自体が、本来、（物理学などに比較し）科学としての純粋さの程度が低いという宿命的事態によって、斯かる独特の社会現象を我々は往々看取することが出来るのである。

経済学における利益集団、即ち、学派……学閥（時には学会、研究会を含む……“派閥主義”、“同族育成主義”）は、問題は結局個々の科学者としての資質如何に関わるであろうが、経済学者自身の生活（種々の政治的・経済的野心——権力志向・所得志向の根柢たる）そのものから直接出てくるところの、何とも言いようのない惨めさ、憐れさを、我々は屢々観察することが出来るのである。

たとえば、我国における所謂“文化人”に時として見られる典型的な行動様式としての無節操は、そのよき一例である。

更にそこでは、たとえば、マルキスト集団として、マルクス（の経済学）を、（それ乃至その研究自体を目的とするのでなく）生活・生計の手段、所謂“食物”・“飯^{めし}のタネ”にしているケースが、当然考えられる。（それも又、一つの現実であるか。）

シュムペーターは、同様事態につき、（筆者程に露骨ではないが）同様タッチで、次の如く述べている。

「……ある特定の分野において科学の研究に身を捧げている専門家達、更に又あらゆる分野において科学の研究に身を捧げている専門家のすべては、一つの社会学的グループとなる傾向がある。これは即ち彼等が、科学の研究もしくは特殊な科学それ自体に対する興味以外に、他のものを共通にしていることを意味する。多くの場合に、彼等は、自ら培養せんと努めるか・又はこれを教えることによって生計を立てている・科学を教授する。これが一つの社会的・経済的タイプ（の人間）を育成する傾向をもつであろうことは、

極めて自然の成り行きである。斯かるグループは、専門家的資格の有無以外の理由によっても、その協同研究家を受け容れたり拒絶したりする。経済学における斯かるグループの形成は、成熟するのに長い時間を要したが、ひとたび成熟したならば、それは物理学におけるよりも遙かに大なる重要性を獲得した。……斯かる場合には、我々は専門家という言葉有条件附で用いねばなるまい。……この経済専門職なるものが、社会的並びに政治的問題に対しては、科学的見解を同一にすること以外の理由によっても又同一であったような態度を展開せしめたのである。この生活条件並びに社会的地位の同一性が、同一の生活哲学や社会現象に関する同一の価値判断を生んだ。〔所謂「マルクスの唯物史観」〕このことが科学の諸学派の（成立という）現象と密接に関連している。』（『前掲書』、47頁、訳90—91頁。）

「物質的生活の……様式は、社会的・政治的・精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規程するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。」（マルクス『経済学批判』、序言。）

（呵々）。

尚、この際、それ自体結論的な重要性をもつものではあるが、今ここで註しておくのが（行文上も）便利である一つの事柄がある。

それは、シュムペーターの場合、科学する者としての主体、所謂「科学に従事する者」が、筆者が（以上の叙述の中で）既に一つの強調を行っている如く、原則として“個人”であることである——。

政治的・利害「集団」、まして「学派」の如きは、むしろシュムペーターの殊更に拒否するところである。何故なら、そこでは垂流として「与太を飛ばす」ことはあっても、「真理を認識すること」——ひいては「創造」を期待することなど、到底望み得ないからである。

シュムペーターの言う。

「……かの深く掘り下げて行くが如き分析……それは直接には何らの實際

的問題の解決を齎らさなくとも認識の進歩のためには全く重要なものであるが、しかも政治的関心の横溢している雰囲気の中では全く繁栄するところのないものである。……全人格を打ち込んでのみ始めて到達し得られるが如き研究の時にはその内面的本質に近づき得ない。」(『学説・方法史の諸段階』, 98—9頁, 訳258頁。)

個人の意識(の内)においてこそ、創造——意識の深化(乃至学的“純粹”に至る知的努力, 知的エネルギー)は可能である。“個人”たることは“分析”にとっての不可欠な条件である。俗な言葉で表せば, “創造は孤独である。”「孤独と自由がその内で支配的原理となる。」(フンボルト)

従って, “個人”(ヘーゲルの所謂“絶対精神”の適用——必ずしも“社会”を必要としない)は, 科学(むしろ, 学問一般)にとっての先験, 大前提とさえ, 言い切って差支えない程である。

これによって, 筆者の立場が, 「経済学」・「経済学史」でなく, (個人的ニュアンスの強い語)「経済学説」・「経済学説史」たる, 一つの大きな理由となっている。(広辞苑によれば, 「学説」という場合には, 「……の意見, 学説」といったニュアンスがある。)

それは又, シュムペーターが『十大経済学者』の如き著をものにした大きな理由でもあろう。(そこには, 十人の経済学者を借りてのシュムペーター個人の投影がある。)

シュムペーターは, 斯かる人物評伝の何であるかについて, 次のように言ったという。

「人の伝記は, 一つの時代並びに一個の環境をば一個人の話に集中せしめる芸術に他ならない。」(『十大経済学者』, 訳者序より)

換言すれば, 一個人がその時代に見識上・思想上絶対的な支配を及ぼし得る時, 即ち一個人がかくも偉大であり天才的(個性的な独創性)であり得る時にのみ, 斯かる言葉は真に生きる。(絶対的……一義的・決定的……哲学・美学。)

「科学的な天才が研究対象に関わらせる価値は, 一つの時代全体の『見方』を規定する。」(マックス・ウェーバー)

科学的実践における個人の尊重……斯くして、シュムペーターの場合——

「……科学的努力の対象となっている……一連の現象の探究に、理由の如何に拘らず自主的に且つ自力によって乗り出す個人を想像する」(『分析』, 45頁, 訳87頁。)

——所以である。

マルクスの場合も——

「……何か新しいことを学び、従って又、自分で考えようと志す読者を想定している。……『汝の道を行け、そして人々の語るにまかせよ!』」(『資本論』, 第一版序文。)

……と。

両者等しく、“個人”を「想像する」、乃至「想定している」。

上述の“個人”に関わる原則的な問題（それは更に仔細な考慮を必要とするが）、それとも併せ（と言うより、ミックスされるところの）“亜流”を生む条件として、シュムペーターは次の如き一般の事情を挙げている。

「……実際問題としては、如何なる科学の研究者も自分自身の独立したヴィジョンから始めて、研究のあらゆる段階を悉く経過するようなことのないのは言うをまたない……科学的知識のストックを後代に伝えていく者は、……実は、興隆しつつある世代に対して、自己の方法、結論のみならず将来の方向や一層の前進の手段についての自己の見解をも教示する多少とも確然たる専門家のグループ〔「集団」としての教授団、たとえば学会所属の〕なのである。……先ず何よりも第一に、上記の社会的機構は驚くほど労力節約的なものである……。これによって、初学者は与えられた忠告に従い且つ自己に当てがわれた仕事をなす傍ら、自己の教師の力量の止まる境界線を越える処女地の探求のために、自己の大部分の力量を解放する筈のエネルギーを節約しつつ、事実の知覚、問題の把握、方法の掌握をなし得るのである。斯くて、ここに瞥見した社会的機構〔筆者の〈経済学の歴史〉は、いわばその函数である〕が、概念的装備の発展や事實的知識の蓄積を促進するのみならず、更に普通に科学的進歩となされているものの最有力な動力〔筆者の〈科学批

判〕をも供する主要な要因であるという点については、何等の道理ある疑念もあり得ないことになる〔?〕。しかし、メダルの他の半面が存することも又明かである。すべての既成の科学における授業は初心者の心を鑄型に嵌め込み、彼が持っているかもしれない独創力の発展を止めていることもあり得る〔と言うより、むしろそれが一般的である〕。』（『分析』、45—6頁、訳88—9頁。）

斯くて、エリートならぬ亜流・凡庸の徒の大量生産は、可能であった。

換言すれば、“エリート”たる規定は、卓絶した創造的才能だからである。シュムペーターも言う如く、“エリート”は動態においてのみ可能である。

従って、たとえば、我国における所謂“東大病患者”なる凡庸をエリートと称する程、場違いの甚しいものはない。それは、恰も、我国における“インテリ”の規定が、その実“(ヨリ多くの)断片的な知識の所有者”、“形骸化した知識を多量に頭に詰め込んで無意味な権威を誇る特権階層”(の別名)であるに似ている。

と言って、我々は、斯かる危険多く・おぞましき「専門家のグループ」(「集団」)から離脱することは困難である。それは、一つには、シュムペーターも指摘する如く——「科学的研究を果す適格性なるものは、大多数の場合、認められた専門家の教えるところ以外の源泉からは獲得し得ないもの」、だからである。(『前掲書』、46頁、訳89頁。)

ただ——しかし、ただ、シュムペーターの言う。

「全く類まれな独創性と力量とに恵まれた個人のみが、能くこれを保持している」

……と。(同頁、同訳頁。)

学界の、その他種々の面での——“驕児”たりし……真の意味でのエリート、天才であった……シュムペーター(或はマルクス)の場合が、これである。

シュムペーター……抜群の才能故の——彼の示した諷刺、諧謔、何より皮肉の数々、たとえば、“資本主義はその成功の故に崩壊する”という知名な命題などは、(彼ほどの知性に恵まれぬ・がしかし・大真面目な)凡庸を翻弄すべく罪深い・度の過ぎた逆説、悪戯であった、と言えよう。

この命題で彼の言わんとしたことの一-halfの意味は(筆者自身の体験に徴して言えば)——

資本主義の崩壊を経済(学)的に説明せんとするあらゆる試み(マルクスの場合を含めて)はすべて失敗であった

ということなのである。(取り違えてはならない。)

何より、同テーマを扱った彼の著『資本主義・社会主義・民主主義』(そのもの)が、ジャーナルな人気(一つは、勘違いからくるところの)の割に、その実、(他の彼の著書以上に)理解の困難な・高度の内容のものなのである。(浅慮、誤解があってはならない。)

それはともかく、ここに到って我々は完全に“^{ギア・アップ}お手あげ”の状態に追い込まれることとなる。何故なら、「経済学説」、従って又「経済学説史」の諸条件を満たすことは、(少くとも数十年に一人か、或ば百年に一人か二人、せいぜい三人といった)エリート、天才以外においては、およそ不可能となるからである。(更に後述)

従って又、斯かる考慮をなす限り、経済学説の発展(断続・革新)は、所詮、斯かるエリート(換言すれば、<科学批判>をなし得る独自・特別な才能……<経済学の歴史>の単なる流れに流されずに……)の断続的継起、シュムペーターの所謂「エリートの周起 de la succession des aristocracies」によって、説明するの他なくなるであろう。(この項、シュムペーターの「企業者」概念をも参照のこと。)

斯くして、我々は、一科学の興隆と共に、その沈滞或は危機(たとえば、“経済学の危機”)の理由(の一半)をも、併せて説明し得ることとなる。

斯かる考察で、既に半ば分明になったことであるが、同様事態は、全く同

様現象で、科学の“既成”（完成した・既成の理論）をその先進国に仰ぐ場合にも、（その原理は等しく、応用のケースとして）起り得ることになる。

即ち、シュムペーター（『資本主義・社会主義・民主主義』の既述の箇所）におけるより進歩した——「特に高度に持続的な構造がそっくり一国から他国へ移転される場合」（の適用）、これである。（13頁、訳20頁。）

マルクス、シュムペーターが問題にした——経済学におけるドイツの後進的状况（既述）……現在の我国における場合が、そのまま適當することは言うまでもない。

これ又、“亜流”発生の一条件である。（我国の場合には、その代替もないといった文字通りの“イナイ・イナイ・バー”であるが……。）

それにしても、我国の場合、それらがたとえ既成の輸入品であるとはいえ、権威ゆるぎない経済学（者）として、日常的に（それらが大手を振って、大量に）横行する（乃至横行し得る）という現象は、それ自体、真に奇異、不可解極まる現象（社会現象）としか、言いようのないものである。（そこには、シュムペーターの所謂「我々自身や我々の先輩の心の創造物との絶えざる闘争」（『分析』、4頁、訳6頁。）の、毛頭だに窺えない。）

“この師にしてこの弟子あり。”我国の学生諸君における論文集ほど専門的・高度な内容（その実、“思い付き”に乏しい、独自の「研究方法」を欠いた、何ら実感のない）も、これ又、世界に珍しい現象ではあるまいか。（我国はそれ程の“文化国家”であるか……。全体としての亜流ではないのか……。）

以上、綜括すべく、シュムペーターの次の言葉を援用しよう。

「……何故に企業者は連続的に、従って各瞬間に於て孤立的に現われないで、集团的に現れるのであるか。その理由は専ら、一人或は二、三の企業者の出現が他の企業者の出現を、又後者が更にそれ以上の且つ益々多数の企業者〔亜流、乃至亜流の亜流〕の出現を容易ならしめ、まさに斯くすることによってそれらを實際に生ぜしめる、ということに存するのである。……『新

結合の遂行』〔創造・革新〕は困難でありただ一定の能力を持っている人々のみに可能である……ただ少数の人々〔エリート、第一級の“人間”〕のみがこの『指導者たる能力』をもち、且つ少数の人々のみが……斯かる方向に於ける成果を挙げることが出来るのである。しかし、一度、一人或は二、三の者が成果を挙げて先駆するならば、斯かる困難の大部分は除去される。これらの最初の人々に次に他の人々が続くことが出来る……益々多くの人々の追随を容易ならしめることとなって、遂に新しきものも慣行的なる又実在的なものとなり、その受容は自由選択の事柄となり終るであろう。(『発展』、339—40頁、訳 579—80頁。)

広辞苑によれば、「亜流」とは、「第一流の人に追随し、ただそれを真似するだけの者。エビゴネン」とある。その他、「同じ流派に属する人。同類の人。とセカンド・クラスもがら」「第一流の人に次ぐもの。第二流の人。」よって、学派・派閥も亜流と不可分である。

即ち、我国における“諸権威”(の多く)は、その実、“諸亜流”であり——マルクス、シュムペーター(或はケインズ)などのような卓絶せる創造的才能・天才の最も嫌悪した「亜流」,「追随」……乃至「追随者たち」(ケインズについては、たとえば、『雇用・利子及び貨幣の一般理論』、3頁、訳4頁参。),に他ならぬのである。(学生諸君は、その又々の追随者である。)

「……徒らに盲従する人々……疑いもなく彼はそういう亜流者を持つことを欲しなかった。自ら考えること——自ら探究すること——自ら立つこと——これらこそ常に幾度となくカントの口から発せられた言葉であった。」(L. E. ボロウスキー『カントの生涯と性格』)

二十数年前、筆者がまだ学生時代、押し掛け的是ではあるが——今は亡き湯川秀樹、大熊信行両先生にコネをもつ機会があった。

言うまでもなく、一人は物理学、一人は経済学における(又、その専門の枠に収まらぬ)我国の逸材である。毀譽褒貶は世の習い、両先生については今だにと

やかくの評判はあるものの、少くとも筆者にとっては、仰ぐに足る先達であった。

大熊先生については気安く話をしてもらえたし、先生の雑誌論文（乃至評論）に感想など書き送ると、これ又気安く招待があったりした。

筆者が、ここで、特に両先生について問題にしたいのは、両先生が夫々我国の自然科学・社会科学（者）の現状——就中その創造性の欠如に、かなり厳しい評価をもって居られたことである。その問題と共に、その打開の方法についても、始終苦慮されていた。

社会科学はともかく、自然科学（殊に物理学）についてはまだ遙かにマシではあるまいかと筆者は当時想像していただけに、湯川先生のきびしい評価は、むしろ意外の感すらあった。

両先生共に、我国の風土、日本人の心そのものの中からの新しい創造を期待されていた。

我国の科学（の現状）について豚のような満足にひたりきっている多くの“諸權威”（その実、“諸亜流”）には、到底理解出来ぬ両先生の志操（の高さ）ではあった。

〔未完（3）で完結〕